

学習スペース・生活環境

公共施設の機能

学びの変化に対応した教室（特別教室）

施設の可変性

特別教室は時代の変化とともに教科の枠を超えもフレキシブルに変えていけるとよい

図工室や家庭科室は動かしにくい重い机が置かれている。フレキシビリティに欠けるため、移動しやすくする工夫があるとよい。

特別教室の融合

学習のための要件としては、例えば理科室と家庭科室は共通しているので、準備室の配置を工夫して、機能を重複することができるかもしれない。

稼働率の低さを地域利用に求めるのかもしれないが、専門性と安全性を両立させながら、教室同士を融合していくことも可能だろう。そうすれば特別教室の有効利用の課題も解消されていくだろう。

コンピュータ教室は1人1台端末になった時代には必要なくなっていると思う。

技術科は大きく変わっている。授業コマ数が大きく減っているなか、スペース負担となっている。機械作業室があるが、機械を動かすことも、必要な機械を廃棄することもできない。

家庭科室や理科室も利用頻度の現状と、共用化に関する検討は、あわせて考えていかなければいけないだろう。

時代が進み、教具が変わってきているので収納スペースが不足しているという声を聞く。また、教具の更新も問題になっている。

児童・生徒の作品を保管・展示するスペースがないことも課題である。

ラーニングセンター

探求的な学習が求められるなかで、授業中に学びが完結するとは限らない。その時、休み時間使ってラーニングセンターで学ぶことができることは重要である。教室にはない設備を使った学習ができるようになるとうい。

ラーニングセンターの配置は難しい。今後、電子書籍に移行するのだろうかとも思う。特別教室の位置関係も大事だと思う。特別教室は設備も必要になるため、容易には動かせない。

被災時に子ども達が勉強できる環境を整えてあげることも重要。

学校再開は避難生活の現状で考えていくべきことだろう。

学校再開には、避難所生活の安定が必要になると思う。避難所運営が落ち着かないと児童・生徒が来ても教育活動は円滑に進まない。

体育館の収容人数を明確にイメージしておくべきで体育館だけで収納できるような仕組みや方法を考えるべきだと思う。

地域・コミュニティへの開放性

家庭科室は必要である。体育館の近くであれば、避難生活時の調理室としても使うことができる。1階に配置されていることも重要である。プライバシーにかかわるスペースは2階以上にするというと思う。

市内学校にも体育館の近くに家庭科室があるが、行事の際に便利である。非常時においても理にかなった配置であり動線と思う。

地域で利用している様子を、児童・生徒が目にするのはよいと思う。例えば音楽が学校教育で終わるのではなく、生涯続く可能性があるということに気づくことができる。

子どもの生活環境

ラーニングセンターは、中学生の居場所になる。一人で勉強できるし、グループでも勉強できる。ただ居ることもできる。放課後や土日、長期休暇も子どもたちが利用でき、居場所として保証されているとなおよいと思う。地域にも開放されているとよい。

ラーニングセンターが子どもの居場所となるように、各校独自の名前がつけられてもいいと思う。

児童・生徒の居場所は大事だと思う。落ち着きを取り戻すときに書架の間でやり過ごすこともあると思う。

現状の図書館は本を読む限りの場所になっている。寝転んですごしたり、グループ活動をしたりしたいという要望を子どもたちも持っている。そもそも閉じられているため中の様子が分からない。オープンになれば、もっと使うようになるだろう。

バリアフリー・ユニバーサルデザイン

バリアフリー化が進んでいない学校が多いため、車いす利用者などの利用はかなり難しいと思う。

インクルーシブな学校

要支援者のためにも電源確保が必要である。医療的ケア児が通学できる現状であれば、避難所としての機能も担保できると思う。

女性の生理用品の不足が考えられる。医薬品なども含めて、ストックしておいた方がよい。また、寝具も重要である。

洪水浸水・土砂災害の想定も必要で、各災害の特性を学んでおくことが重要。

学校は一時的な避難所であり、長期的な避難を受け入れるようにはなっていない。ただ、それでも冷暖房や寝具なども整備・配備した方がよいだろう。長期的な利用は想像しにくい。

運営体制

簡易トイレの用意があるか、マンホールトイレが整備されているのか。その使い方の周知も含めて検証するべきである。

避難所の運営組織があるとすると、学校施設においても運営組織が活動するスペースを用意しておくべきだろう。教職員スペースを使うわけにはいかない。マニュアルや防災活動の記録などはそのスペースに配備しておくべきだろう。

教職員が運営に携わっていることもあるだろう。避難所と学校とのゾーニングは平時から地域と学校が話し合うべきだと思う。

事前準備が大事である。教職員のなかでも鍵の管理を知らないため、教職員間や行政との連携を図るべきだと思う。

学校図書館も図書館である。公共図書館も変わってきており、滞在型図書館というタイプが現れている。居心地のよい公共図書館を参考にするとよいと思う。

避難所としての学校

建物が無事であることが最優先。建物で暮らすことができることが大事である。

避難所運営を見据え、いかに使いやすいハードを用意しておくかが重要。

機能性の高い備蓄倉庫の整備が大事

要支援者など自家用車での避難者を想定し、駐車スペースが必要なのではないかな。

スマホで通信できる環境を整えておくことが重要。充電ができるだけでは不足。

電源確保が課題になると思う。ソーラーパネルは容量が限られている。蓄電池をどこにどのくらい配備するか考えるべきだと思う。

マニュアルの準備等、被災時に「とりあえず学校に行けばなんとかなる」ような環境整備が必要。

電子ロックにすれば、災害時に自動的に解除することができるのではないかな。その後の避難所運営でゾーニングすればよいと思う。

行政職員や教職員は学校の近くに住んでいるわけではないので、すぐに駆け付けられないかもしれない。一次的には地域住民が運営しなければならず、マニュアルや学校の配置図を整備しておくべきである。特に初動は重要である。

教職員は遠方に住んでいるため、地域で避難所を運営することを前提にして考える必要がある。学校と地域を含めた組織を立ち上げて検討するべきだろう。

小学校17校中12校に地域自主防災会が立ち上がっている。学校管理職、学区の自治会、防災安全課の地域担当、社協などから構成されている。それを広めていけばよいだろう。

社会教育分野ではコミュニティスクールの議論をしている。避難所運営にもコミュニティスクールが役立つのではないかな。

避難所運営は児童・生徒も関わることもできるのではないかな。顔の見える関係を学校と地域で築いておけば、避難所運営も円滑にできるのではないかな。

施設間で情報共有が必要なのだと思う。避難所でも、行政が障害者支援のためのツールの整備状況を情報発信しておくべきである。